

2022年5月22日 説教「目を覚ましていなさい」

マタイの福音書 24章 36～44節

イエス・キリストが教えられた、終わりの日についての学びが進んでいます。終わりの日はいつ来るのでしょうか。

1. その日、その時 (36～38)

①誰も知らない (36)「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」ここまで、主イエスは終わりの日について語って来られました。その前兆には、偽キリスト、戦争、戦争のうわさ、民族対民族の争い、飢饉、地震、迫害、裏切り、偽預言者、世界への宣教といったことがあると示されました。そして、荒らす憎むべきものがエルサレムに立つ時には、逃げなさいとも教えられました。選民への惑わしがあることも伝えられ、そしていよいよ終わりの日が近づくと、天体に異常が生じ、キリストが天の雲に乗って再臨されるというのです。ラッパの響きが聞こえ、選びの民が集められることになるのです。そして、主はいちじくのたとえ話をされます。またすべてらが示されるまでは焦らずに堅実に生きることをも示唆されます。35節には「天地は滅び去ります。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。」とあり、有限の終わりと永遠につながる御言葉が語られました。

さて、それではその日はいつになるのでしょうか。それが 36 節にあります。

「それは誰も知りません。」というのです。御使いも知らないし、子なる神ですら知らないと言われます。父なる神がそれを把握しておられ、子なる神は人としての立場にあり、知ろうとはしておられないということでしょうか。

②ノアの日のよう (37)「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。」。キリストはこの預言をなさっているのは、十字架にかかる前のことです。その主が復活して、昇天された後のことを言われているのです。それからすでに、2000年弱の年月が過ぎましたが、再臨はまだです。しかし、「一日は千年のようであり、千年は一日のようです」(Ⅱペテロ 3:8)とあります。二千年経って、終わりの日は来なかったのだから、これからもないだろうと高をくくることはできないのです。再臨は、ノアの日のようだと言われました。言うまでもありません。創世記 6～9 章にあるノアの時代と、その出来事のこと言われているのです。

③洪水前の日々 (38)「洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。」ここには、洪水が起こる前の日々が語られます。つまり、ノアとその家族は主の言われるままに、箱舟をゴフェルの木を用い、

内側にはアスファルトを塗り造りました。長さ 132メートル、幅は 22メートル、高さは 13.5メートル。巨大な三階建てでした。人々が飲んだり、食べたり、めとったり、嫁いだりしてたとあります。創世記では地は暴虐に満ちていたとありますが、人々は欲望のままに歩み、ノアが神から命ぜられて箱舟を造っている時には、嘲笑いました。箱舟が何に用いられるのかが、わからなかったのです。

2. 洪水、畑や臼で働く人々 (39~41 節)

①洪水が来て (39)「そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」そして、ノアと家族と動物たちが箱舟に入ると、洪水がやってきました。昨日までは、住む所、家具や道具もあり、おいしい物を食べ、何事もなく過ごし、奢っていたのですが、すべての物がさらわれてしまったのです。再臨の主が来られる時も、そこにいる人々は前触れにも気づかず、突然とやって来たと思うことになるのです。

②畑のふたり (40)「そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりは残されます。」主が再臨される時は、終わりの時です。その時について、キリストは一つのたとえで話されました。畑に二人いるとします。当時の農業では小麦、大麦、オリーブの木、ぶどう畑が主流でした。この二人は何を育てていたのでしょうか。そのうちの一人は取られ、一人は残されるといいます。つまり、ノアの時と同じように、救われる者と滅ぼされる者があるといっています。これはあくまでも例話ですが、厳粛な内容です。

③臼をひくふたりの女性 (41)「ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりは残されます。」同じメッセージを別のたとえでも伝えられます。二人の女の人が臼をひいているという設定です。石臼です。臼は脱穀などに用います。臼をひいている一人は取られ、一人は残されるとあります。気をつけるべきことは、仕事の内容が問題なのではありません。救われる者と取られる者があるのだと警告されているのです。

3. いつ来られるか (42~44 節)

①いつ来られるか (42)「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」再臨の主がいつ来られるかということについては、誰もわからないのです。これを聞いている者達が、できることは「目をさましている」ことです。緊張感をもっていつ主が再臨されても良いように備えることです。

②泥棒はいつ来るか (43)「しかし、このことは知っていなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。」目をさましているべきことについて、たとえ話が

伝えられます。それは泥棒のたとえです。時代や人種や文化が異なっても、泥棒がいることは共通のようです。泥棒がいつ来るかについては、誰も知りません。押し入れられる時間がわかっているならば、家の主人は警戒して、被害を未然に防ぐことができるでしょう。しかし、泥棒はすきをねらってくるのです。

③用心していなさい (44)「だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。」泥棒がいつ、どのようにして、やってくるかわからないならば、いつも怠らずに用心するしかありません。それと同じように、再臨の主も思いがけない時にやってくるのです。いつ、こられても良いように時を過ごすことが教えられるのです。

《結論》

終わりの日の前には前兆がある事、前兆を認めたなら、終わりの日を意識すべきことも教えられました。そして、天地は有限であって滅び去る一方、主の御言葉は永遠へとつながっていくことをも示されました。

今朝の課題は、「主はいつ来られるのか」です。これまでは、前兆について知らされてはいても、それがいつなのかということについては語られてきませんでした。ところが、その日については父なる神以外は誰も知らないといっています。御子イエス・キリストは、神ご自身ですから、それを知ることが存在ですが、人間の側に立つ主はあえてそれを知ろうとはされていないのです。それほどに、終わりの日がいづなのかについては、隠されている出来事だということがわかります。

ただ、終わりの日には、あのノアの時のように、その日に向けて、準備がなされているということは確かなのです。それなのに、事柄が進んでいても、人々は全くそれに気づかずに、したい放題のことをしているといっています。そして、再臨の主が来てしまうならば、畑にいる者たちのなかの、ある者は取られ、ある者は残されるといっています。これは脅しではありません。それぐらい言われないと、わからないぐらい、人は鈍感になっているからなのです。

そこで主は、今やはっきりと言われたのです。「目をさましていなさい。」と。泥棒は、「今から泥棒に行きますよ」などと言うはずがありません。むしろ、気づかれぬように侵入しようとするし、相手が油断している時や場合を狙ってきます。とするならば、その家を守ろうとするものは、目を覚まして、監視しているしかないのです。肉体の上で、ずっと目を覚ましていることは不可能でしょう。私たちは眠らなければならない者達ですから。ここで言われていることは、私たちの霊の眼を覚ましていなさいということです。戦争、飢饉、疫病、地震、偽キリスト、偽預言者などを認めた時に、ただ

地上的に憂慮したり、恐れたり、警戒するだけでなく、終わりの日を意識したいのです。一方、それらが知らされてもいたずらに焦らずに、堅実に働きを続けることも肝要なのです。しかし、人間は愚かであり、それらの警告がなされているさ中でも、不正なことをし続けやすいのです。罪は習慣的になりやすいのです。心の中であまりよろしくないなど、自分ながらに思っていることがあるならば、悔い改めて捨てていくということも大切です。そして、その代わりに永遠につながることを行っていくという決心ができれば良いですね。

再臨の主をお迎えするということは、恐ろしいという印象が強いかもしれません。しかし実をいえば、再臨は喜ばしい出来事なのです。再臨待望運動がなされたこともあります。霊の眼を覚ましていこうと意識する者たちは、再臨を待ち望むことができます。「こころして待て、主の御民よ、日は傾きて、夜は迫れり、やがて花婿来たりたまわん、まどろむなかれ、しばしなれば」(讚美歌172:1)とあります。花婿を迎える、花嫁のような心地で再臨の主を待ち望んで歩もうではありませんか。霊の眼を持って生き、いつ主が来られても良いようにあゆみたいものです。